

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01531

研究課題名(和文) 民主党政権期に培われたフーバー政権元国務次官キャッスルの対日人脈の研究

研究課題名(英文) A study of William Richards Castle's connections with Japanese officials cultivated under the FDR's Democratic Administration

研究代表者

廣部 泉 (Hirobe, Izumi)

明治大学・政治経済学部・専任教授

研究者番号：80272475

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1933年のルーズベルト政権誕生以降、真珠湾攻撃に至るまでの日米関係にとっての重要な局面において、駐米日本大使館が、それまでの経緯から良好な関係を形成していたウィリアム・キャッスルとの関係に依存し続け、それによって、政権党である民主党関係者との関係構築を怠ったことによって日米交渉期に米側の意図を把握することができず、日米関係が破滅的な結果に終わったことを明らかにした。また、一方で、キャッスルら共和党保守派との関係継続が、戦争を経て継続し、戦争終結後、急速に良好な日米関係が構築されることに大きく貢献したこともまた事実であることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで真珠湾攻撃までの日米関係についての研究は、米民主党政権との日本政府との関係を中心になされた。すなわち、フランクリン・ルーズベルトのホワイトハウスやハル国務長官率いる国務省を中心になされてきた。本研究は、これまで見逃されてきた野党共和党関係者、なかでもキャッスル元駐日大使と駐米日本大使館との関係に焦点を絞り、民主党が政権党になって以降も、いかにキャッスルとの密な関係に依存し続けたかを明らかにしている。それは、日本の在外公館が日本に好意的な人々との交流に依存し、クリティカルな局面においてその国の政策決定者とのパイプが出来ていないという今日の日本外交のあり方にも示唆を与えるものである。

研究成果の概要(英文)：This study demonstrates that: the Japan Embassy in Washington heavily depended on the help of their Republican friends such as William Richards Castle even after Franklin Roosevelt took office; its failure to construct close relationships with the Democrats in the administration dealt a fatal blow to Japan at the time of US-Japan negotiations in 1941; and those close relations with the Republicans contributed to the quick restoration of US-Japan relations after the end of the war in 1945.

研究分野：国際関係史

キーワード：日米関係

1. 研究開始当初の背景

1930年代から1940年代にかけての時期を対象とする米国の対日外交に関する先行研究は、フーバー大統領が下野して以降、1952年の大統領選挙でアイゼンハワーが勝利するまで民主党政権が長きにわたって続いたため、民主党政権下のホワイトハウスや国務省の対日外交を中心に行われてきた。一方、野党であった共和党関係者は外交政策に直接影響を与えることができないままであったとして顧みられずにいた。特に1933年のフランクリン・ルーズベルト政権誕生から真珠湾攻撃に至る時期に関しては、日米関係の研究は、ルーズベルト大統領のホワイトハウス、ハル国務長官率いる国務省、中でも極東部長のホーンベックなどと日本政府との関係に焦点が絞られてきた。そのため、筋金入りの共和党员で、フーバー政権下において駐日大使と国務次官を務め、フーバーが大統領選挙で敗れたことによる政権交代によって1933年に下野して以降、政府の外に居続けたウィリアム・キャッスルが、1948年に米対日協議会共同議長として立ち現れるまでの約15年間の活動についてはほとんど明らかにされていない。

そうしたなか近年徐々にではあるが、フランクリン・ルーズベルトの大統領就任によって下野した共和党系の人々の一部が、政府外にありつつも駐米日本大使館関係者を代表とする日本人外交官や有力者と連絡をとり続けた事実、そして、ルーズベルトの死後、トルーマン政権においては影響力を発揮し、それによって日米関係に大きな役割を果たしたという事実が明らかになってきた。なかでも学会に大きなインパクトを与えたのは、フーバー元大統領に関する世界的専門家である井口治夫氏の一連の研究である。中でもその代表作である『誤解された大統領 フーヴァーと総合安全保障構想』(名古屋大学出版会、2018年)は、これまで見逃されてきた民主党政権期におけるフーバー元大統領の重要性を明らかにする画期的なもので、同じ共和党保守派に属し、またフーバーとも交流を続けていたキャッスルの役割を重視する本研究の可能性を示唆するものであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、なぜ15年の長きにわたって外交の現場から離れていた野党所属の民間人であるウィリアム・キャッスルが、対日政策に大きな影響を果たすことになる組織の共同議長として1948年に日米関係の表舞台に突然登場することになったのか、そして実際に日米関係に大きな影響を与えることができたのか、その在野の15年間(1933年~1941年)に培われた日本人との人的関係にその鍵があるとの仮説を立て、それまで顧みられてこなかったその間の彼の活動を明らかにすることにある。すなわち、1933年の政権交代で下野したフーバー政権の国務次官で駐日大使も務めたウィリアム・キャッスルが、ルーズベルト民主党政権下において野党の、しかも民間人の立場にありながら、いかに日本政府との関係を継続させたのか、そしてその関係がどのように戦後の占領期に大きな役割を果たすに至ったのかを明らかにする。

キャッスルに関するこれまでの研究は、駐日大使並びに国務次官などの国務省要職在職中に集中しており、1932年のフーバーの大統領選挙における敗北に伴い国務省を退職して以降の15年間については明らかにされてこなかった。また、研究があったとしても親族によるものでその視角に偏りがなかったとはいえない。そのため、1948年に日米の保守派を結びつけることで日米友好をめざす米国対日協議会が組織され、共同議長として、もはや長年アメリカ外交に関わっていなかったはずのキャッスルが選出されると、その抜擢の理由はひとえにかつての元駐日大使の肩書の故のみと従来はみなされてきた。そのような見方を覆すのが本研究の目的の一つである。ルーズベルト民主党政権期に、実はキャッスルが共和党勢力と日本の外交官や有力者たちとを結びつける役割を果たしたことを示す。そして彼の活動が戦争を経て結実したのが米国対日協議会であることを明らかにしたい。更には、戦前にキャッスルが高く評価した人物が戦後に米国の保守派に手厚くサポートを受けたこと、すなわち、キャッスルが1930年代に培った対日人脈によって、戦後日本の保守勢力を差配した影の立役者であったことをも説得力をもって論じたい。

3. 研究の方法

(1)アメリカ側における本研究の根本史料となるのは、キャッスル日記とキャッスル文書である。前者はハーバード大学ホートン図書館に、後者はアイオワ州ウエストブラッチのハーバート・フーバー大統領図書館に所蔵されているものである。それらはキャッスルがいつ誰と会ってどのような話をし、話し相手にどのような印象をもったかなどが事細かに記録されている。その中には多くの日本人も含まれている。共に膨大なものであるが、それらを精査することでキャッスルの対日人脈の形成と働きを明らかにする。国務省での彼の元同僚や大学の同窓生などの関係者の文書も随時参照し、根本史料を補う。

(2)日本側では、キャッスルと交流した日本人側の狙いや意図、印象を日本人の文書を検討することで明らかにする。元駐米大使の日記や回顧録、国立国会図書館憲政資料室所蔵の野村吉三郎関係文書や樺山愛輔関係文書、牧野伸顕関係文書や外交史料館所蔵の須磨弥吉郎文書などが

中心となる。

(3) 上記の日米の資料を突き合わせることで、1933年のキャッスルの国務省退官から真珠湾攻撃に至るまでの間に、彼がどのような日本人とどのように交流し、誰からどのような印象を受けたのかをまず明らかにする。その上で、誰と誰を結びつけ、そこで培われた人間関係が、占領期の保守派の日本人にどのような影響を与え、ひいては日本の針路をどのように変えていったかを調査する。

4. 研究成果

(1) キャッスル文書やキャッスル日記の精査、並びに彼とコンタクトのあった日本人の個人資料の検討によって、キャッスルが下野して以降も、駐米日本大使館は、良好な対日感情をもち、日米関係の機微にも詳しいキャッスルとの居心地の良い関係に依存するあまり、政権担当政党である民主党政権関係者と十分な関係構築が出来なかった実態が明らかとなってきた。共和党に属するキャッスルをあまりに重視する在米日本大使館の態度は、政府内にいる民主党員には好ましくは思われなかったが、それに対して日本大使館員の態度はいささかデリカシーを欠いていたように思える。それは新任の日本大使が着任時に、当時比較的面会するのが容易とされていたハル国務長官への面会が困難を極めたことと無関係ではない。この民主党政権に対する人脈構築の努力の不作為は、ハルの国務省が当初から日本に対して必ずしも好意的な態度を示さなかったことにも起因しているが、さらなる努力が試みられるべきであった。政権党である民主党有力者とのパイプがまったくできていなかったことは、1941年の日米交渉において致命的となった。野村吉三郎が着任したときの国務省幹部の常識では考えられない冷たい出迎えにそれは象徴されている。民主党有力者との間で、駐米日本大使館が少しでも良好な人間関係を構築出来ていたら、あそこまで冷たい交渉にはならなかったのではないだろうかと思えてならない。

一方で、戦前にキャッスルが関係もった日本人に対する彼の好印象は戦中も変わることもなかった。それは戦前の親日派とされたアメリカ人の多くが、真珠湾攻撃で日本人に対する見方を180度変えたのに比べると稀有なことであった。維持されたキャッスルの好意的対日態度は、戦後すぐ、日本にも信頼すべき自由主義や民主主義を愛する人材がいるという主張になって表れた。それらの自由主義的日本人をキャッスルをはじめとする米国の保守派が支持することで、日米関係の急速な改善に大きな役割を果たしたことが明らかとなった。その時、キャッスルは無作為に知り合いの日本人を支持したわけではなかった。1933年のキャッスルの国務省退官から真珠湾攻撃に至るまでの間に、彼がどのような日本人とどのように交流し、誰と誰を結びつけたかを検討すると、戦前の人間関係がそこには大きく影響していたことがわかる。戦前にキャッスルに信頼感を抱かせていた日本人が、戦後、米国の保守派のサポートを受けることが出来るようになったのである。

(2) これまで1930年代から1940年代にかけての長期政権となったルーズベルト政権期における日米関係研究は、ハル国務長官や国務省極東部長を長く務めたホーンバック、駐日大使のグルーなどに研究が集中し、政権交代によって外交の現場を去った人々との日本との関係を扱った研究はほとんどない。野党の立場にあった時期の共和党関係者と駐米日本大使館との関係を明らかにした研究は極めて少なく、本研究は価値ある研究と言える。また、米共和党関係者と日本人との戦前の関係が、厳しい戦争を通して死に絶えることなく、戦後の早い時期に復活し、戦前の印象によってどの日本人を支持するかということの判定に用いられたことを示したことに意義がある。

(3) 日本の対米外交は、米国が大統領制をとっていることもあり、突然予想もしなかった人物が政権の座に就くと、政権に対する人脈がまったくできておらず慌てることが少なくない。日米関係が日本の外交にとって最重要といえることを考えると由々しき事態である。確かに、外交官にとって、日本に好意的な人々との交流はやりやすいものである。しかし、日本に対して必ずしも良い見解を持っていない人々と関係を取り持つという困難で時に不慣れた試みこそ、常になされるべきではないだろうか。日本に好意的な米国人との付き合いに終始して、日本に対してよい印象を持っていない人々との間の人脈構築を避けて来た実態が、1941年の日米交渉という日本の歴史にとってクリティカルな時に致命的な影響を与えるに至った過程を明らかにして本研究は、突然の米国の政権交代後に米政府とのパイプを失い右往左往しがちな、相手国の時の政権党一辺倒ともいわれる日本外務省の対米外交姿勢にも一石を投じる社会的意義のある研究であると考える所以である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 廣部 泉 | 4. 巻 869 |
| 2. 論文標題 明治大正期対米移民の人種関係観 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 歴史評論 | 6. 最初と最後の頁 54-64 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 廣部 泉 | 4. 巻 90 |
| 2. 論文標題 1930年代から1940年代にかけて共和党人脈が対日関係に果たした役割の研究 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要 | 6. 最初と最後の頁 232-257 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 Izumi Hirobe |
| 2. 発表標題 Japan at the crossroads |
| 3. 学会等名 Belarusian State University, Faculty of International Relations（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 廣部 泉 |
| 2. 発表標題 シドニー・L・ギューリック 日米関係改善に向けて |
| 3. 学会等名 京都大学学術研究支援室事業「移住と伝播 アジア太平洋地域におけるキリスト教関連資料、およびその活用」アジア太平洋地域キリスト教関連資料活用ワークショップ（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 岩野 卓司、丸川 哲史、廣部泉、ほか25名 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 法政大学出版局 | 5. 総ページ数 378 |
| 3. 書名 野生の教養 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Tomoko Akami, Jon Thares Davidann, Izumi Hirobe, Seiko Mimaki, Hiroo Nakajima, Nobuyuki Nakamura, Yutaka Sasaki, Yoshie Takamitsu | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 Routledge | 5. 総ページ数 172 |
| 3. 書名 International Society in the Early Twentieth Century Asia-Pacific: Imperial Rivalries, International Organizations, and Experts | |

| | |
|--------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 筒井清忠、廣部泉、ほか21名 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 筑摩書房 | 5. 総ページ数 508 |
| 3. 書名 大正史講義 | |

| | |
|--------------------|-----------------|
| 1. 著者名 廣部泉 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 講談社 | 5. 総ページ数 237 |
| 3. 書名 黄禍論 百年の系譜 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|